



鍋島菊水図皿 (径15.5cm)



柿右衛門菊図青磁壺 (高さ16.7cm)



古伊万里献上手菓子鉢 (径21cm 高さ8cm)

いずれも元禄時代 (1688-1703) 焼成 (写真提供・前坂晴天堂)

そば猪口の魅力

—— 本山 幸彦

もう十五年もまえになるが、私は狭心症で入院した。そのとき、医師の厳命で禁煙を余儀なくされたのである。三十年余りも親しんできた煙草と別れることは、実につらかった。禁煙を記念し、つらさを紛らわすため、私は昔から好きだった古伊万里を集めようと考えた。とはいっても、写真のような優美な柿右衛門や鍋島の名品に、手が届くわけではない。私は江戸時代一貫して焼成されてきたそば猪口を対象にきめ、せめて古格ある猪口をと志した。だが、古格ある猪口は寛永(一六二四—四六)年間の初期伊万里に属し、その頃でも入手は困難であった。

そば猪口は湯呑みや酒盃、あるいは向付、そばのダシ入れなどと用途は広く、何がその本命なのか、決まった意見もないが、柳宗悦や料治熊太など民具の美を追求した先人たちが、民芸と名づけて珍重したものの中には違いない。民芸のもつ手作りの味、用に徹した簡素な美は、猪口の大きな魅力である。しかし、私は一〇〇〇種以上もある図柄の豊富さ、一つひとつ手ぬきせぬ誠実な心打つ美しさがたまらない。

猪口の図柄は四季感に富み、植物、動物、人物、風景と多岐にわたるが、日々の幸運を願う吉祥文様も少なくない。ただ、初期の猪口の文様は、中、後期と違い、哀調を帯びた秋草や草花の文様が多く、猪口の作りも、生がけでどっしりし、底は部厚く、高台付である。磁肌はやや黒ずみ、手にとれば重量感が心地よい。淡い呉須で描かれた文様は、筆のタッチも力強く、自然な素朴さに溢れ、あたかも李朝の白磁染付を見る思いがする。初期猪口だけの魅力といつてよい。

豊臣秀吉の朝鮮侵略に従った九州の大名たちが連れてきた彼地の陶工は、有田の地で日本最初の磁器を焼いた。このことを想起すれば、それも不思議ではなからう。そういえば、猪口の語源は、朝鮮語で湯呑みを意味する鐘甌(Chonggu)だそうだ。

集め始めた年は明日は元旦だというのに、私は出しふる妻を連れ出して、大晦日の京都、なかでも新門前界隈を猪口を求めてさまよったものである。その甲斐あって今日までに五〇〇ほどの猪口が集まったが、一番好きな初期の猪口は五%にもみえない。それだけ古いものは、稀少で貴重だということか。

ところが、一九六五年から七〇年にかけて、有田最古の天狗谷古窯址で、六次にわたって実施された考古学的発掘調査と残留磁気測定の結果、初期伊万里や初期猪口の生産年代に、驚くべき疑問がよせられた。天狗谷では江戸後期に再建された窯も含め、一六〇六年頃から、一八一五年頃まで、二〇〇年も焼き継がれ、後期にも初期と同じ様式の磁器が焼成されている。そうだとすれば、初期伊万里とは年代の概念ではなく、様式の名称ではないのか? というものである。しかも、最近の古陶磁の雑誌は、「初期」そば猪口は古い有田の産ではなく、実は一八世紀以後の波佐見の産だと断定している。この「事実」は初期猪口の風格を愛する私には信じられない謎であった。

真偽をたたくべく、私は波佐見に飛び、資料館で数十箱の破片を調べ、波佐見の磁器の破片を網羅した図鑑を精査した。しかし「初期」猪口の破片は見つからなかったのである。私は何故かほつとした。けれども、この謎は放置できない。その究明は今後の古陶磁界の課題となるにちがいない。

(文学部教授)

HEADLINE

7 6 5 4 2

- 面 法学研、東西研シンポジウムを開催
- 面 第2部千里山移転について
- 面 留学生の日本事情見聞記

海外で安宿を泊まり歩いていると、若者たちとの出会いがある。旅の情報交換があいさつで、意気投合すれば近くの飲み屋にくり出す。

ローザンヌでは、国際色豊かな八人のグループでパーティーにくり出した。ジョッキ片手の話が、最後には徴兵制のディスカッションにかわる。当然「日本はどうだ」ということになる。オクスフォードでは中国系マレーシア人から、戦争中の日本軍の残虐行為について詰問を受けた。「私はまだ日本人を信用できない」▼日本人の若者にも会う。会社をやめ、中国、旧ソ連、東欧を旅し、マルセイユに流れてきた元会社員。就職を前に休学し、一年かけて世界を放浪している学生。日本を離れて一年半、ワーキング・ホリデイをカナダで過ごし、今はヨーロッパを旅する若者。彼らは一様に、自分の考えを明確に口に出してはほらない。多少無鉄砲に思えても、大人である。ブランド目当ての買物旅行やリゾートめぐり、短期のバックや語学学校のお仕着せの留学プログラムとは違う▼「青年時代に旅をしない者は、一生旅をしない危険をおかしている」(E.キボン)。なるほどこういうことだったのだと合点がいった。日本社会の国際化を担うのは彼らではないか。チャンスは前髪をつかめ。(K・S)



学内めぐり

その4

他研究所の目的達成に必要と認められる事業。研究調査活動の柱といえるべきものは、平均五名の研究員からなる共同研究班である。平成五年度の研究班体制は、法学教育研究班、E.C.法研究班、児童福祉研究班、企業法務部研究班の四班からなっている。各班の研究班の報告は「研究班報告」シリーズとして刊行される。研究会は、班別の研究会以外にも、特別研究

法学研究所

国際的視座に立った法文化研究の拠点



法学研究所は、昭和六十二年(一九八七年)に大学の付置研究所として設置された。場所は千里山キャンパスの法文庫を登って左側、岩崎記念館の四階にある。

最近、法学の研究対象は、国際化や産業構造の高度化などとともに、いちじるしい変貌を遂げつつある。たとえば、知的所有権、国際取引、環境保護など、さまざまな領域において複雑な法律問題が生じ、国際条約の締結をふくめて、各国とも新しい立法動向が顕著になってきた。本研究所は、こうした法の変動と新しい複合法領域の形成に対応して、立法・司法・行政に関する学際的・国際的視野に立った研究を推進し、法文化の発展に寄与することをめざしており、この目的を達成するために次の事業を行う。

(1)理論・政策の研究および実態調査、(2)研究および調査についての成果の発表、(3)研究会および講演会等の開催、(4)研究および調査の委託、(5)研究資料の収集、整理および保管、(6)外国人研究者の受入れ、(7)その他総合研究会がそれぞれ年三回程度開催されている。研究会は、公開事業として、現代法セミナー(年二回)、シンポジウム(年三回)、公開講座(年二回)を開催している。この公開事業も回を重ね、次第に多くの参加者を得るようになってきた。たとえば、「ソ連邦の崩壊」をテーマとしたシンポジウムは、出席者が多く、研究会の会議室から溢れる状態であったし、榎原

研究所はまた、適宜、特別行事をも実施している。たとえば、平成三年(一九九一年)には、大津事件判決百年記念行事として児島惟謙と大津事件を現代的視点から再検討し、あわせて児島惟謙の人と足跡を明らかにするために、講演会(法学部と共催)、シンポジウム(特別展示を実施)、報告書「危機としての大津事件」を刊行した。また、平成四年(一九九二年)十一月には、E.C.法

研究会のこれまでの研究実績をふまえて、本学国際交流センターのほか、駐日E.C.委員会代表部、プリティッシュ・カウンスル、ドイツ学術交流会などの協賛のもとに、内外の著名な研究者を招いて、E.C.統合に学際的にアプローチする国際シンポジウムと、法学部との共催による特別講演会を成功裡に開催した。その報告書も近く刊行される。

研究者は自国の宗教思想や社会的、教育的状況に立脚して自説を展開しているのに対して、日本の研究者は作品に直立的にアメリカの特性を求め、そのもろもろを、読者の反応の際立った対照がまず目に映る。しかしコンピュータを駆使してイメージのニュアンスを、処女作の不安定な構成を、他の作家等との比較や影響関係を、そして演劇の分野を、論じたものなど多彩で力作揃いであった。特にエゴロ

「生きていること」野村幸正著 (福村出版・二二〇〇円) 子どもと、真言密教の熱心な信者であった祖母に教わった歌がある。空海の心の底に咲く花は、彌陀よりほかに知るものぞなき。野村さんの近著を読んで、久しぶりにこの歌のことを思い出した。

野村さんは、アメリカ型の実験心理学にあきならず、一九八七年から八八年にかけてインドのプーナ大学に留学し、インド哲学における「心」の概念について研究した人である。その経験は前著「関係の認識」に詳しい。帰国後、野村さんは、さらにユング系の臨床心理学についての研究を深めたようだが、本書は、

「日本の経済学史」(関西大学出版部・三〇〇円) 私たちが若かりし頃、著者の流麗な文体は後進の学徒の賞嘆してやまなかったところだが、近年はそれに枯淡の趣さえ加わって、いっそう味わい深い文章となっている。本書はそうした著者が主として一九八〇年代に発表された論文のいくつかを選んできて、全体は三部からなっている。第一部ではアダム・スミスを中心としたわが国における経済学史研究にかんする論文が、第二部ではわが国の経済思想の歴史の展開過程にかんする論文が、第三部ではわが国における経済学の制度変化をめぐる論文がおさめられている。河上肇と本書との関係にかんする論文はもとより、本書

「だから歴史は面白い」(合沢永一対談集) (潮出版社・一六〇〇円) 本書は、「歴史は、雄弁で、痛烈で、愉快な証人」であるとする著者が、「歴史街道」や「プレジデント」などに発表された最近の対談十三編をまとめて、新たに単行本として出版したものである。対談の相手は、渡部昇一、堺屋太一、会田雄次、奈良本辰也、津本陽、中西信男、陳舜臣、松村暎、アール・マイナー、司馬遼太郎で、いずれも現代を代表する知識人である。対談に登場する人物も、坂本龍馬、レーニン、毛沢東、昭和天皇、ヘンリー・フォード、松下幸之助、チャップリン、アインシュタイン、信長・秀吉・家康などの戦国武将、福沢諭吉、勝海舟、諸葛孔明、司馬遷など、歴史をつくった多彩な顔顔れとなっている。

「生きていること」野村幸正著 (福村出版・二二〇〇円) 子どもと、真言密教の熱心な信者であった祖母に教わった歌がある。空海の心の底に咲く花は、彌陀よりほかに知るものぞなき。野村さんの近著を読んで、久しぶりにこの歌のことを思い出した。

「サルトルとポスト構造主義」(関西大学出版部・三〇〇円) フランス現代哲学専攻の著者のライフワークともいえる力作で、サルトルの哲学に始まり、構造主義からポスト構造主義にいたるフランス現代思想の流れが丹念にあと

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代国際経済学」(W.J.イシヤ) (多賀出版・三九一四円) 本書はケイブス・ジョー・ス、クルクマン・オプスフェ

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

法学研究所

国際的視座に立った法文化研究の拠点

法学研究所は、昭和六十二年(一九八七年)に大学の付置研究所として設置された。場所は千里山キャンパスの法文庫を登って左側、岩崎記念館の四階にある。

最近、法学の研究対象は、国際化や産業構造の高度化などとともに、いちじるしい変貌を遂げつつある。たとえば、知的所有権、国際取引、環境保護など、さまざまな領域において複雑な法律問題が生じ、国際条約の締結をふくめて、各国とも新しい立法動向が顕著になってきた。本研究所は、こうした法の変動と新しい複合法領域の形成に対応して、立法・司法・行政に関する学際的・国際的視野に立った研究を推進し、法文化の発展に寄与することをめざしており、この目的を達成するために次の事業を行う。

(1)理論・政策の研究および実態調査、(2)研究および調査についての成果の発表、(3)研究会および講演会等の開催、(4)研究および調査の委託、(5)研究資料の収集、整理および保管、(6)外国人研究者の受入れ、(7)その他総合研究会がそれぞれ年三回程度開催されている。研究会は、公開事業として、現代法セミナー(年二回)、シンポジウム(年三回)、公開講座(年二回)を開催している。この公開事業も回を重ね、次第に多くの参加者を得るようになってきた。たとえば、「ソ連邦の崩壊」をテーマとしたシンポジウムは、出席者が多く、研究会の会議室から溢れる状態であったし、榎原

研究所はまた、適宜、特別行事をも実施している。たとえば、平成三年(一九九一年)には、大津事件判決百年記念行事として児島惟謙と大津事件を現代的視点から再検討し、あわせて児島惟謙の人と足跡を明らかにするために、講演会(法学部と共催)、シンポジウム(特別展示を実施)、報告書「危機としての大津事件」を刊行した。また、平成四年(一九九二年)十一月には、E.C.法

研究会のこれまでの研究実績をふまえて、本学国際交流センターのほか、駐日E.C.委員会代表部、プリティッシュ・カウンスル、ドイツ学術交流会などの協賛のもとに、内外の著名な研究者を招いて、E.C.統合に学際的にアプローチする国際シンポジウムと、法学部との共催による特別講演会を成功裡に開催した。その報告書も近く刊行される。

「日本の経済学史」(関西大学出版部・三〇〇円) 私たちが若かりし頃、著者の流麗な文体は後進の学徒の賞嘆してやまなかったところだが、近年はそれに枯淡の趣さえ加わって、いっそう味わい深い文章となっている。本書はそうした著者が主として一九八〇年代に発表された論文のいくつかを選んできて、全体は三部からなっている。第一部ではアダム・スミスを中心としたわが国における経済学史研究にかんする論文が、第二部ではわが国の経済思想の歴史の展開過程にかんする論文が、第三部ではわが国における経済学の制度変化をめぐる論文がおさめられている。河上肇と本書との関係にかんする論文はもとより、本書

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「だから歴史は面白い」(合沢永一対談集) (潮出版社・一六〇〇円) 本書は、「歴史は、雄弁で、痛烈で、愉快な証人」であるとする著者が、「歴史街道」や「プレジデント」などに発表された最近の対談十三編をまとめて、新たに単行本として出版したものである。対談の相手は、渡部昇一、堺屋太一、会田雄次、奈良本辰也、津本陽、中西信男、陳舜臣、松村暎、アール・マイナー、司馬遼太郎で、いずれも現代を代表する知識人である。対談に登場する人物も、坂本龍馬、レーニン、毛沢東、昭和天皇、ヘンリー・フォード、松下幸之助、チャップリン、アインシュタイン、信長・秀吉・家康などの戦国武将、福沢諭吉、勝海舟、諸葛孔明、司馬遷など、歴史をつくった多彩な顔顔れとなっている。

「生きていること」野村幸正著 (福村出版・二二〇〇円) 子どもと、真言密教の熱心な信者であった祖母に教わった歌がある。空海の心の底に咲く花は、彌陀よりほかに知るものぞなき。野村さんの近著を読んで、久しぶりにこの歌のことを思い出した。

「サルトルとポスト構造主義」(関西大学出版部・三〇〇円) フランス現代哲学専攻の著者のライフワークともいえる力作で、サルトルの哲学に始まり、構造主義からポスト構造主義にいたるフランス現代思想の流れが丹念にあと

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代国際経済学」(W.J.イシヤ) (多賀出版・三九一四円) 本書はケイブス・ジョー・ス、クルクマン・オプスフェ

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

今月の表紙

本山 幸彦(もとやま・ゆきひこ)教授 日本思想史、教育史専攻。研究の中心は明治・大正の教育史だが、思想史・政党史でも著名。



「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

編集後記

本号では第2部の千里山キャンパスへの移転を特集した。平成六年四月授業開始を目指し、準備が着々と整えられている。現在のところ、どちらかといえば建物や施設の整備の面が先行しているようだが、移転を契機に教育内容のよりいっそうの充実や改革が進められることと思われる。今や大学教育の中心が問われ、厳しい評価を受ける時代なのであるから、大学改革の時代には、「通信」の内容にも必ずと変化が生じる。二〇〇号を越える長期にわたって守られた、正確な情報の伝え手という役割にこたえて、大学構成員の知見、また知るべき情報は何かを的確に判断し、紙面に反映させるといふメディアとしてのインテリジェンスが求められるようになってきた。インテリジェンスの取材による特集記事作成は、それに応えるささやかな試みである。(網治・芝井)

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。

「現代の経営と管理」(ミネルヴァ書房・二五〇〇円) 二十一世紀を迎えるにあたって、われわれを取り巻く環境の変化の激しさは目を驚かすものがある。この現実から生起する諸問題を分析するために、「経営学の歴史をひもとく」が、その歴史の延長線上で現在の経営と管理の問題を見つめ、さらには経営理論の将来への展望を切り開こうとする「ことを目指して編まれたのが本書である。それゆえ、この厳しい現実を前にしてわれわれに課された課題は何であるのか、またその解決がいかになされるべきかについての指針を本書は与えてくれる。